

## 琵琶湖にある島

## 1. 沖島

近江八幡市から琵琶湖の沖合約1.5kmにあり、日本で唯一、湖沼の有人島で、周囲約6.8km、面積約1.53km<sup>2</sup>である。現在、約450人の人が住んでおり、小学校もある。

歴史的には、天智天皇の寵臣藤原鎌足の子、藤原不比等が奥津島神社を建立したことに始まったと言われ、琵琶湖の航行安全を守る神の島として崇拜される無人島であったとも言われている。伝承によれば、保元・平治の乱に敗れた清和源氏の落武者7人が島を開拓し、定住したのが現在の島民の祖先であると伝えられている。

島内にある浄土真宗本願寺派の西福寺には、島を訪れた真宗中興の祖・本願寺第8代蓮如上人が残したとされる「虎斑の名号（とらふのみょうごう）」、「正信偈（しょうしんげ）」が寺宝として公開されている。

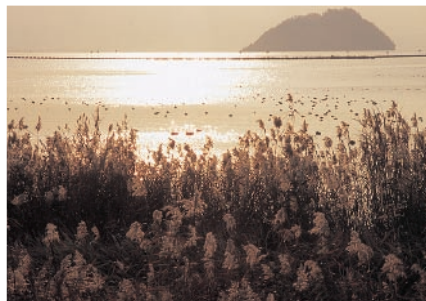
湖上交通が盛んになると、戦略上の要衝として歴史書にも登場し、時の権力者から水軍として、あるいは航路の警備、輸送等の重要な任務を任せられ、その見返りに漁業権などの特権を認められてきた。現在でも、産業としては、大半の島民が漁業関連の仕事に従事しており、その暮らしぶりは琵琶湖と密接に関連している。

島には、2軒の民宿があり、近年は沖島と堀切港を結ぶ沖島通船の運航で釣り客が多く訪れている。

## 2. 竹生島

長浜市の沖合約5kmに浮かぶ周囲2kmあまりの小島で、奈良・平安の時代から西国三十三所観音霊場として多くの参詣客で賑わってきた。年間を通して多くの観光客が訪れ、琵琶湖八景の一つにも数えられている。

島内には、真言宗豊山派、巖金山の号を持つ西国三十三所霊場第三十番札所の竹生島宝巖寺がある。奈良時代、聖武天皇の勅命を受けた僧行基が、小堂に弁才天像を



写真T3-2-1 竹生島

安置したのが始まりとされる。観音堂は重要文化財、入口の唐門は国宝である。本尊大弁才天は、日本三弁才天の一つである。

また、都久夫須麻神社の国宝の本殿は、豊臣秀頼が豊国廟（一説には伏見城の日暮御殿）を移築、改修したもので、殿内部に狩野永徳または光信筆と伝わる襖絵や絵天井をはじめ、高台寺蒔絵の柱・長押などが燦然と輝き、桃山文化の粋が結集されている。

## 3. 多景島

彦根市内の琵琶湖岸より沖合約6.5kmに浮かぶ周囲600mの小さな島で、彦根港から遊覧船で渡ることができる。島全体が断崖絶壁で、岩の上に松や竹が生い茂り風致に富んでいる。島内には日蓮宗の見塔寺や桜田門外の変で井伊直弼が暗殺された時、鮮血を滲ませたという題目岩などの名所がある。島の西方4kmには「沖の白石」が浮かび、ここからの眺めが一番美しいと言われる。

（商業観光振興課）

## 琵琶湖ゆかりの仏像

琵琶湖の北部に浮かぶ竹生島は、千手観音を本尊とする西国三十番の観音霊場であるが、また、水の神である弁才天の島としても名高い。

弁才天は、古代インド神話の水の神が次第に学問や音楽などの女神となり、仏教にとり入れられてからは、大弁才天とか妙音天などと呼ばれ、弁舌、福智、延寿、除災増福、戦闘などをつかさどる女性の天部像として信仰される。その姿は『金光明最勝王經』に説く八本の手に刀、斧などの武器を持つ八臂弁才天像と、『現図胎蔵界曼荼羅図』に琵琶を奏でる音楽神として描かれる二臂弁才天像との二種に大別される。

竹生島の弁才天信仰は、縁起によれば、慈覚大師円仁が自刻の弁才天を安置したことに始まるという。平安時代以降、天台宗の影響を受けながら発展したとみられ、『別尊雜記』という平安時代末期の図像集に「竹生嶋弁才天ノ三井寺法輪院本也」と注記のある弁才天の姿が描かれていることから、平安時代末期の竹生島には八臂弁才天立像が祀られていたことが判明する。だが、今は、平安、鎌倉といった古い時代の弁才天像は現存しない。

宝巖寺（真言宗）弁才天堂には、多くの木造弁才天像が安置されている。これらは夏季に執行される蓮華会という祭礼行事の際、「竹生島祭礼絵図」に描かれた舟渡御の様子と同様に琵琶湖上を舟で運ばれた彫像である。蓮華会とは、妙法蓮華經（法華經）を講讃し神仏に蓮華を献じた伝統ある雨乞いの行事のことで、毎年、湖北地方の富豪から選ばれた頭人によって弁才天像が造像され、島に奉納されるところに特徴がある。

現存する奉納像の中では室町時代の1557（弘治3）年銘の坐像が最古。ほかに永禄、慶長、元和、寛永などの年号を墨書する像があるが、なかでも1566（永禄9）年銘の坐像（像高113.2cm）は、戦国大名浅井長政



写真T3-3-1 木造弁才天座像(宝巖寺蔵)

の父、久政ゆかりの尊像として注目される。久政の生母尼子氏（法名寿松尼67歳）が蓮華会の頭人を勤める際に造像し、翌年に奉納したことが知られている。

これら奉納像は、いずれも頭上に老人の顔をした白蛇（宇賀神）がとぐろをまき、頭部正面に鳥居形の金銅製宝冠をつけ、さらに八本の手に鉾、輪、弓、宝珠、鍵、棒、矢、剣を持って坐る福神の姿で、中世に成立した『弁天五部經』に説かれる宇賀神弁才天の特徴を示している。とくに宝珠と鍵を持つところは福德神や財宝神としての弁才天の性格を一層強調したもので、室町時代には民衆の間に弁才天信仰が深く浸透していたことを物語っている。

（琵琶湖文化館 宮本忠雄）